

■平成 27 年度白鷹町史談会研修会
「道智(どうち)道(みち)」
～湯殿山巡礼の道～

平成 28 年 2 月 13 日(土)の午後 1 時 30 分から平成 27 年度の研修会を開催しました。

今回のテーマは平成 27 年 8 月 29 日、30 日と 2 日にわたる「道智道」踏査の報告会でした。お話ししてくださったのは

1 基調講演

原淳一郎氏 (米沢女子短大准教授)

2 報告 道智道を歩く

伊藤 隆氏 (白鷹山岳会事務局長)

志田菊宏氏 (湯殿山神社宮司)

布施範行氏 (六十里越街道山船頭協会)

の各氏でした。



町内外から 70 名ほどの参加者で、中央公民館の会議室がいっぱいになり、慌てて資料を増刷するなどの大盛況でした。

当日の報告者の伊藤隆氏から御寄稿いただきましたので、何回かに分けて掲載します。

湯殿山への道のり (その 1)

伊藤 隆

掲載する写真は私(伊藤)が撮ったもののほか、丸川桂一郎さん、布施範行さん、志田菊宏さん、高梨みささん、江口義雄さん、木村さんから提供していただいております。



①出発に至るまで

湯殿山を目指した 11 名の思いはそれぞれあると思いますが、私が湯殿山に歩いて参拝しようと思ったのは、昭和 54 年に白鷹山岳会の佐竹さんが歩いて参拝したというのを聞いたあたりからだ。古い地図に載っている道智道を見たり、黒鴨の分校脇の分れ石「右荒山とちくぼ 左湯殿山」は旧荒山、栃窪部落との分かれ道に、日影部落跡の先にある「右湯殿山 左あさひゆみち」は朝日鉱泉との分かれ道にある。それらを見ると現在では想像もできないが、まさしくかつて参拝者が列をなして歩いたという道智道である。いつかは私も歩いて湯殿山に参拝して見たいものだと思い馳せていた。しかしながらその後は待てども行くような話も聞こえなくなり、私も日々の生活に追われ、あれから 30 年、気がつけば還暦を迎え退職になり体力も落ちてくる一方である。他力本願ではダメだと思い、何とか自分一人でもルート进行调查して行ってみたいものだと知り合いに言っていたところ、どこからか田尻の丸川さんに伝わったようで、「行くときは声をかけてくれ」と連絡をいただいた。

茎の峰の先は朝日町である。雪解け後の調査を前に朝日町役場に問い合わせたところ、特に整備はしてなく、どうなっているかは不明ということだった。

②調査を開始する

平成 26 年 6 月 8 日に丸川さんと加藤さんと私で萱野口の調査に向かう。茎の峰峠の先の山道は、少し下ると途中から林業用の作業道が縦横に切られているため、大杉

を目印に行ったという丸川さんの記憶を頼りに試行錯誤の末、ようやく萱野に辿りつく。ルートは藪に覆われ、刈払などしなければ大変だなと思った。

続いて9月13日、木川口の調査に丸川さんと向かう。一ツ沢林道から入り萱野からの合流点に達し木川側に向かう。林道の枝道が多数あるが地図にない道も多い。地図で地形を確認しながら木川側に降りる道を探す。1本目はハズレ。北側の2本目を降りて行くと、終点の藪の先に歩道が続いているのを発見する。どんどん降りて行くと木川沢に着く。

地図の道智道は峰を降りたあと沢の右岸を通り、途中で左岸に渡ることになっている。大正15年の落書きのあるブナの大木を発見し、沢を下るがなかなか道らしい形跡はない。諦めかけた頃道型があり、横断箇所も発見する。朝日川右岸の道は手入れされており快調に進み吊橋に達する。吊橋を発見して感激した丸川さんの姿が印象的だった。吊橋は無残な状態で渡りは無理だが朝日川の渡渉は可能で、対岸に渡り大規模林道に達する。丸川さんは前回一ツ沢を迂回したので、これで35年前の参拝とつながったことになる。

帰り足で、沢から少し高いところに道があるのを発見し、確認しながら進む。沢の氾濫を受けにくい所に作ったのだと感心するが、土砂崩れで2箇所は迂回しなければならない。しかし、茎の峰峠からここまでは歩けるという確信を持てた時だった。帰って地図上で照合すると、間違いなくほぼ道智道を通ってきたことが確認できた。

平成27年の春になり丸川さんから、「木川まで通して歩いてみないか」と言われ、登山道の下刈りや山開きなどの行事の合間の7月2日に行くことにする。山岳会の高橋さん、森の井上さんも同行していただくことになった。行くからには茎の峰峠からタバネ沢までの藪を刈ることにする。刈っておけば道であることが分かるようになり迷うこともなく、湯殿山まで行く道も開けるのではないかとの思惑もあった。

当日は茎の峰峠から刈り下り、モトヤ沢に刈払機を置き萱野から林道を歩き木川沢

へ下る。今度は最初から歩道を歩き、崩れた2ヶ所のみ迂回する。朝日川に達し朽ち果てた吊橋を見て対岸を望む。「湯殿山に行けるのではないか」そう確信した瞬間だった。帰り道は、刈り上げながら茎の峰峠に達した。(次号へ)

■平成28年度白鷹町史談会総会

平成28年度総会を下記のように開催します。ぜひ御参加ください。

- 1 日時 平成28年5月28日(土)
- 2 総会 役員改選を予定
- 3 研究発表
渋谷敏己さん 平吹利数さん
石井紀子さん
- 4 懇親会

なお、5月20日(金)までに出席を教育委員会竹田さんへ御連絡ください。

平成28年度の会費を当日いただきたく存じます。御準備をよろしく願います。

■チベットの鐘

丸川二男

通称、山口の「北の沢」と呼んでいる常福院の平田さんは、先年、奥さんを亡くされてから一人でおられるので、時折訪ねては世間話に興じてくる。先日も寄ってあれこれ話をしていたら、途中でお茶の手を休めて二階に上がって行き、しばらくして、紐でつながった金属の皿のようなもののホコリを払いながら降りてきた。

大小、二組のものを手にして、小さい方のものを「あなたにあげます」というのだが、さて、もらっても・・・と言ったら、彼は「これが何かを調べて・・・」と行って、二つの金属をなでていた。触れ合うと「チリーン」と、ご詠歌をあげる人たちが鳴らす鈴の音か、夏の風鈴に近い澄んだ音がした。

それは見たこともないものだった。二つで一組らしく、皮の紐でつないであり、小さなシンバルのようにも見えた。むろん名前も、どんなふうにして、何に使うもの

かわからない。紐が通してある穴の周囲には梵字をくずしたような文字が書いてあった。



家に帰ってネットを見たが、手がかりがない。「仏具一覧」にはないし、インドか中国か、などと考えていたら、裏側に見たこともない文字というか、記号のようなものが刻印されていた。もしやと思って「チベット・法具」と入れたら、見事に当たった。

それを見ると姿、形もそのままである。物の名前は「ティンシャ」といって、「チベット密教の法具」とあり、実際の使い方や音も流れていた。チベットの中にはこれを作っているところがいくつもあるらしく、値段は高いもので一万円ほどである。書かれている文字は「オンマニペメフム」と読み、「蓮の花の宝」という意味らしい。観音菩薩の真言を表しているというから、さしずめ「おん あろりきや そわか」ということになろうか。文字や吉祥紋が盛り上がっているものは、型による鑄込み作業によるものだろう。

それにしても、である。チベットで作られた仏具が、どうやってここまで流れてきたのだろうか。彼は骨董市で求めたといい、誰かがチベットに行ってお土産にでも求めたか、輸入でもしたものが不要になって骨董として売りに出されたのだろうかという。

チベットでは僧侶の修行の一部にこの音を聞くということがあるらしく、高僧ともなれば相当に高価なものを持ち歩き、瞑想しながら清浄な音に触れて、観音菩薩の功德にあやかろうとするらしい。日本ではヨガなどに用いられることがあるという。

だいたい私たちの生活の中には演歌やクラシックなど、音楽を聴く人を除けば耳を傾けて「音を聴く」ということがない。山に入ってブナの大木の幹を流れる水の音を聴くとか、海のイルカの鳴き声を聴くとかは聞いたことがあるが、神仏と関わりがあるという話は聞いたことがない。除夜の鐘でさえ耳をそばだてて聞くことがないから、教会の音楽が身近なところにあったヨーロッパとは歴史的な違いがあるのかもしれない。もっとも笛や太鼓などの楽器も、元は自然の音を真似た素朴なものだったろうが・・・。

なにせ不信心な自分がこれを持ち歩くのも気が引けるが、なりゆきである。せめて其処ここに持って行っては鐘を鳴らし、遠いチベットの大きいなる観音菩薩の慈悲の心が、清らかな音になってこの世界に広まるようにと思うのだが・・・。

■青苧を食べる

守谷英一

町内のあちらこちらで見かける青苧が気になっていた。見かけるのは田圃の畦の土手とか空き地になっている耕作地とか様々な場所なのだが、白鷹町のあちらこちらにあるといえる。

上杉氏がこの土地を所領したとき、上杉景勝の重臣であった直江兼続が十王にやってきて、この土地は青苧にむいているといって栽培を奨励したという伝承がある。また、史料によると米沢藩の青苧栽培の中心は白鷹町と南陽市であったともいうから、現在野生化した青苧の源流は新しくとも江戸時代にあるのだろう。

町内では、現在は青苧の栽培は見られなくなっている。いつ頃まで栽培していたのか気になっているのであるが、確かなことはわからない。昭和30年代頃までは作っていたかもしれないということは十王の荒川一美さんから伺った話だ。

また、青苧の繊維をとった後のカラは、わら屋根の下地に使われたとも荒川さんか

ら伺った。さらに獅子舞の幕を獅子頭に付けるには青苧の繊維（苧麻 ちょま）を現在でも使う。仲町の深山神社の場合は松下商店から買っているというが、町内には大江町から求めているところもあると聞いた。青苧が日常生活で実用になっていたのはそんなに遠い時代のことではない。だから、白鷹町には多くの青苧挽きの用具が現在でも残されている。

けれども現在の青苧はあちらこちらで邪魔者にされている。刈っても刈ってもまた出てきて、放っておくと1メートル以上になってしまう。かつての大切な作物の地位は本当に下落してしまった。

そこで、食べてみたらどうだろうかと考えた次第。青苧はカラムシ（苧、梟、学名：Boehmeria nivea var. nipononivea）といい、イラクサ目イラクサ科の多年生植物である。一方、山菜のアイコはミヤマイラクサといい（深山刺草、学名：Laportea cuspidata）イラクサ科ムカゴイラクサ属の多年草である。「科」は同じイラクサ科であるから大丈夫であろうと見当を付けた。

さらに数年前に大江町の青苧の焼畑にいった時、すでに芽が出て伸びていた青苧を摘み取っていることに気がついた。どうするのかと伺うとゆでておひたしにするとのこと。大きくなった葉っぱはペーストにして素麺に混ぜたりしているという。これは食べられるという確証を得た。

大江町では現在、「青苧御膳」というのを歴史民俗資料館で提供している。メニューは、

- * 青苧モチ(きなこ、くるみみそ)
 - * 青苧の生麺
 - * 青苧の茎煮
 - * 青苧のプリン
 - * 旬の野菜肉巻き
 - * 柿のぬた和え
 - * 大根のチーズのせ
- だそう。

この春、我が家の青苧は元気良く芽を出している。株も増えてきた。これは食べてみるべきだと考えた。そこで、ほどよく伸

びているものを摘み取ってきて家内に調理してもらった。



2016. 5. 1 撮影守谷

ゆでてサラダと味噌汁の実にした。大江町の地域おこし協力隊員高橋里奈さんによると「食べた感じはアイコとシドケの間という感じですかね」ということである。家内は山菜のえぐみの強いのが苦手なのでおひたしは断念したが、実際に食べてみて悪くはない。これがなぜ食べられないでいたのか不思議なことである。

考えてみると、紅花も最近は食べるようになった。食用の紅花も栽培されているという。それも思いつかないことであった。

紅花や青苧はこの土地では換金作物であったことが関係しているかもしれないと考えてみた。紅花は紅餅にして、青苧は繊維にして初めて商品になる。それを途中で食べてしまうなどは「もってのほか」だったのではないかと（もっとも紅花は途中でおろ抜くからそれは食べたかもしれない）。だから、一般的な食物にはならなかったのではないかと想像してみた。

会員の諸兄諸姉にお願いです。今年は青苧を食べてみませんか。もう一番芽吹きは無理でも、この後刈られた株からまた伸びてきますので、ほどよく伸びた頃に摘み取って召し上がってみてください。

意外に癖が少ないので大丈夫食べられると思います。また、それほど堅くはないと思います。「アイコとシドケの間」のような味であるのか是非、感想をお聞かせいただきたいと思います。

邪魔者扱いされている青苧の新しい利用法が生まれて、食文化が少し豊かになることを夢見てこの稿を終えたいと思う。